

(二十四) 「板箕堂橋」と「三軒茶屋」

昭和十年頃まで東林木町の斐伊川の堤防に幅約一メートル・長さおよそ一〇〇メートルの板橋が架けられていました。

この橋の歴史はわかりませんが、伝承によりますと大正時代の橋は水面からかなり高いところにあつて、約八・九寸巾（約三十センチ）の板が二枚従板に敷いてあり歩いて渡るには恐ろしかったと言ひ伝えられています。

しかし、度重なる斐伊川の大洪水で「板箕堂橋」はいつも流されていましたが、昭和のはじめには水面のわずかな潜水橋として付け替えられてからは、流されることは無かつたと言われています。

これを証明する「簸川郡蔦巢村・板箕堂橋」と記された貴重な写真には、斐川町鳥屋町内と前口町内の土手（堤外新田の沖の沖堤から現在の斐伊川の中央部にあつた鳥屋新田の沖堤までの川幅をまたいで）に架けられている橋が写っています。

また、橋の架けられていた所は現在の伊丹堂から川上およそ二〇〇メートルの所にあつて、そこには「三軒茶屋」と呼ばれていた屋敷が建っていました。

昭和十年に行われた斐伊川治水工事まで斐伊川中央部で耕作されていた水田はほとんど東林木の人々のものでしたが、この工事のため川幅は三倍に拡張になつて、耕地の全面が川敷として買収され「板箕堂橋」は廃止されてしまいました。



古老の話によれば、明治・大正の頃、斐伊川左岸堤防は斐川平野北部の重要な幹線道路だったようです。特に国鉄や電鉄開通以前は松江市と出雲・大社方面への物資の流通や大社参りの人々の交通手段としては宍道湖の船運であつたため、平田で下船した人々が斐伊川土手の幹線道路を通行していたと言われています。

また、直江方面からの大社参りや鱒淵寺詣りは「板箕堂橋」を使用する人々で賑わいをみせていたそうです。

そして、今市と宍道湖の平田の丁度中間あたりに伊丹堂があり、いつの頃からか「三軒茶屋」ができ、通行者達の憩いの場となりました。

その「三軒茶屋」は斐伊川の改修工事の際撤去され、「三軒茶屋」の住民たちは前口東町内と平田町に住んでおられます。